

「父は消防団」

菊池市立七城中学校 三年 高野 大輔

僕の父は消防団下した。今は引退しています。

父が消防団の時は、毎日、玄関に服とヘルメットが置いてありました。僕は毎日それを見て学校に行っていました。そんな時、なんで金ももらえないのにしてるの？って父に問うと、「さあ、自分が大人になったらわかるぞ」と言われました。その後、母に、絶対し

なきゃいけないのときいたら、しなくてもいいけど、お金を払わないといけないと言われました。なぜ、お金を払わないといけないのか、しなくてはいけませんか、自分では、わかりません。でも、そう決まってるのであれば僕も、しかりとしたいと思います。

ある日、僕の家で、三、四人の消防団の方達が来ました。何の用かなーと思っっていると母がお父さんが今年で辞めるけど、辞めないうでくださいって言いにきていると聞きま

お父さんはどのくらい優秀だったのかなーと
思いました。しかし、お父さんはいつもマイ
ペースでだらしないお父さんしか見ていな
か。たお父さんが、信頼されていたなんて、初
めてで、びっくりしました。父はいやいや言
っていましたが、もう一年することにしたみ
たいでした。

父は、サイレンが鳴ると、すぐに家を出て
いきます。その時に、玄関にある服とヘルメ
ットを持っていきます。僕は心配になりなが
らも見ています。火事などで消火に行くとき
死んだらいみがないと思っで行ってくると
いいんですけど、まっすぐだと僕は思うので
そうはいかないかなーと思います。

僕達の中学校では、少年消防団として、小
学生の時からやっていきます。練習は二日間し
かありませんが、とてもきつくて、厳しく指導さ
れます。その後、出初め式で発表します。今
年の出初め式が僕と父と一緒にする最後の出
初め式でした。残念ながら父を見れませんで

したががんばつていたのかなと思います。
そんな父がひさしぶりに熱くなつていたと思
います。

本職は農家ですが、消防団もがんばつてい
ました。

最後に父が「はっぴとヘルメットほこりが
ぶつてよかったです」と言っていました。